仁川港の大型ドック建設(1)

大型のドックが必要である、という考えが日露戦争が終わった明治 39 年ごろから仁川市民の間で広まった。なにしろ仁川港は開港のときから仮設に次ぐ仮設で近代港湾とはとてもいえない状態だった。・干満の差が 10 メートル以上もあるというこの海域の特殊事情があったからである。満潮時でも桟橋に接岸できるのは小型船だけであり、大型の貨物船は沖合に停泊しそこから貨物をハシケに積み替えて揚陸しなければならなかった。しかも時間の経過とともに内港に砂が堆積して水深が浅くなり、接岸できる船はどんどん小型化していった。39 年にはとうとう帆船しか接岸できなくなり、漁船の入港が禁止されて魚の価格が高騰、社会問題になった。

日露戦争が終わると韓国の貿易量は激増、陸揚げに時間とコストがかかる仁川港を敬遠し釜山港、元山港を利用する客が増えだした。特に釜山港は京釜鉄道、京義鉄道を通じて朝鮮半島全域への輸送が便利ということで急増していた。

こうした情況をみた統監府は韓国政府に対策を講じるよう勧告、韓国政府は光武 10 年(明治 39 年—1906,年)、仁川港など 10 港を対象に港湾施設改築 5 カ年計画を策定した。仁川港には 88 万円余の予算が計上された。その内容は土砂の浚渫と長さ 108 メートルの鋼脚桟橋 1 本、長さ 72 メートルの木製桟橋 2 本の新設、下仁川駅からの貨物引き込み線敷設、大型クレーン 2 基据え付け、税関庁舎の増築などだった。

5 カ年計画が進行していた隆熙 3 年(明治 42 年—1909,年)、韓国政府は計画期間を延長するとともに追加の予算措置を発表した。それによると釜山港に 200 万円、鎭南浦港に 100 万円が割り振られたのに仁川港には僅か 12 万円が追加されるというものだった。これに対して仁川府民は猛烈に反発した。仁川港を見捨てる計画だと思ったからである。

同年 4 月 8 日、仁川民役所で「仁川築港有志協議会」が開催され、長年の懸案である築港をどうやって実現するかを協議した。その結果、仁川港は韓国の表玄関であり国家事業として築港に取り組むべきだという請願書を政府に提出すること、それに先だって築港期成市民大会を 17 日開催、在留邦人戸主全員の署名を集めることなどを決議した。世論を喚起して社会に訴えようという狙いだった。

歌舞伎座で開かれた築港期成市民大会では「米国独立戦争のときパトリック・ヘンリーは『我に自由を与えよ。しからずんば死を与えよ』と叫んだ。我らは今言わんとす。『我に築港を与えよ。しからずんば死を与えよ』と」といった勇ましい演説も飛び出した。請願書への署名は 1295 人にのぼり、「仁川港湾の修築は韓国の開発と対外貿易の発展上、急速着手するの必要ありと認む」という決議文を沿えて信夫淳平理事官を経由し曽根荒助統監代理、高永喜度支部大臣、朴斎純内部大臣に提出した。

新聞各紙も「温良羊のごとき仁川市民もついに憤りをもって奮起せり。政府の偏った措置に対しもはや忍ぶ能わざるに到り猛然として立てり」などこぞって書き立てた。これでようやく築港問題が動き始めたのだった。

仁川港の大型ドック建設(2)

干満の差が激しい仁川港には人工による大型港湾施設が必要であるという考えは早くから存在していた。開港直後には杉村濬(ふかし)副領事が杉村案を公表している。イギリス領事館下の海から月尾島方面に向け円形の弧を描くように二本の防波堤をつくり、内側の海を浚渫して干潮時でも船が出入りできるようにするという計画だった。ただ工事費は当時の金で 10 万円かかるとされ、韓国政府にはその金がなく、居留民が会社を作って運営する構想も出たが居留民から資金が集まらず沙汰やみになった。

開港後、輸出入業務は順調に推移していたが、やはりネックは干満の差だった。貨物の積み込み積み卸し業務が支障なく行えるのは 1 日 4 時間程度。1ヶ月で 80 時間しかなく、効率が悪い。作業可能な時間帯は桟橋が大混雑する。

居留民たちは韓国政府顧問兼総税務司の目賀田種太郎を招き、抜本的対策を講じるよう要請した。仁川港を視察した目賀田顧問は「月尾島、小月尾島から日本公園まで防波堤を作り、その内側を大規模浚渫する」という目賀田案を提示し、「抜本的改革はこれしかない。しかし工費は 2600 万円かかる。韓国政府にそんな金はない。政府に資金的余裕が

できるまで待て」と言って帰った。

居留民たちは次に日本の測量分野の権威者とされていた肝属兼行海軍中将を招いて相談した。肝属中将は 2 日かけて詳しく調査した結果「月尾島の南側と小月尾島北側の海を開いて運河状の水道を作り、それ以外は 2 本の防波堤で囲んで内海はドックとする」という肝属案を示した。その工費は 400 万円と試算された。

いずれにしても膨大な費用がかかるということで放置されていた。明治 42 年 4 月 17 日、仁川の歌舞伎座で開かれた築港期成市民大会は消極ムードを一変させた。しかも 10 月 27 日の居留民会総会で、総工費のうち 50 万円を居留民が負担することを決めたのである。居留民を指揮する信夫淳平理事官は着任前、肝属中将から「仁川に赴任して築港計画を進めてくれないか」と依頼され理事官就任を決断したいきさつがあっただけに力を入れていた。

明治 43 年 8 月 29 日、日韓併合が実現すると日本の第 27 回帝国議会は 44 年 3 月、仁川の築港計画を承認したのである。

計画は朝鮮総督府が設計、税関の南から日本公園までの海岸を埋め立て、中央に面積約 10 万平方メートル(3 万坪)のドックを作る。ドックに通じる水路は干潮時でも水深 4,2 メートルまで浚渫する。ドックの船舶出入口はパナマ運河にならって二重閘門にし、ドック内では水深を常に 7.87/メートル(26 尺)に保つ。ドックには 4500 トン級の船が同時に係留でき、干潮時でも作業ができる。が鍋記には大型のクレーンを 3 基備える。小型船舶洋の石垣も併設するというものだった。

予算総額は 348 万 3394 円。年度別内訳は明治 44 年度 53 万 3394 円、大正元年度 60 万円、2 年度 60 万円、3 年度 65 万円、4 年度 65 万円、5 年度 45 万円で 6 カ年計画だった。

仁川港の大型ドック建設(3)

明治 44 年(1911)6 月 11 日、待望久しい築港起工式が仁川で行われた。寺内正毅朝鮮総督、荒井賢太郎度支部長官、坂出鳴海同支部税関工事課長、宮本又七仁川税関長、岩崎直英仁川居留民団長、中野太三郎仁川府尹代理らが参列、午前 8 時から仁川神社で上原賢三神官の斎主により地鎮祭が行われた。続いて寺内総督らは小型蒸気船で沖合 400 メートル地点に浮かんでいる台船に向かった。台船はきらびやかに飾られ、「鎮護」という文字が彫られた江華島産花崗岩の基石が吊り下げられていた。上原神官修祓のあと寺内総督が基石を吊り下げていたロープを切断すると同時に花火が打ち上げられ、満艦飾に飾られた港内の全ての船が汽笛を鳴らした。日本公園に待機していた軍楽隊が君が代を演奏、全員黙祷して工事の無事を祈った。重さ 1300 キロの基石はゆったりと揺れながら海底へと沈んでいった。

この日仁川は休日になり、家々は日の丸を掲揚、提灯を掲げた。大きな商店や企業は緑門を飾り、電飾灯をはりめぐらした。街頭には至る所に舞台が設けられ、手踊りや剣舞、相撲などが競演された。

午後 1 時からは日本公園で祝賀会が開かれた。1000 人を超える来賓を前に軍楽隊が演奏、続いて朝鮮古代楽隊による朝鮮音楽演奏も行われた。寺内総督は「朝鮮併合から 1 年も経っていないのに貿易は驚くほど伸びている。5 年後には朝鮮横貫鉄道も貫通する。仁川の繁栄は間違いない」という趣旨の祝詞を述べた。

工事は順調に進んだが、着工 2 年目あたりから計画が小さすぎるのではないか、拡張する必要があるのではないかという意見が出始めた。とくに穀物を運ぶ小型船の船着き場が確保できるのか、という精米業者の不安は深刻だった。しかし工事は当初の計画に沿って進められ、大正 7 年(1918)6 月 11 日築港竣工式が行われた。

築港計画は貨物取扱量が年間 60 万トンになるという予測をもとに作られていた。ところが竣工 1 年後の大正 8 年には 63 万 2900 トンを記録、同 10 年には 74 万 6490 トン、昭和 2 年には 101 万 5800 トンと計画を大幅に上回った。日本の帝国議会は大正 14 年 3 月、全会一致で仁川港拡張を決議、総督府に増設を図るよう求めた。

総督府も重い腰をあげ、まず松坂町と月尾島の間に防波堤を築いて内海を浚渫、小型船の停泊能力を増やした。ドックについては、南側に大拡張することが必要と分かっていたものの、予算の関係で見送り、東側に木造桟橋を設置して 2000 トンクラスの船 5 隻が接岸できるように増設した。これにより当初計画の 2 倍の貨物を扱えるようになった。設備としても大型クレーンの増設、貨物積み込みのための引き込み線 7 本新設などを実施した。

こうした施策が功を奏して昭和 8 年(1933)の輸移出入貨物取扱量は 129 万トン、輸移出入貿易額は 1 億 1870 万円、昭和 10 年にはそれぞれ 184 万 3000 トン、2 億 410 万円、昭和 12 年にはそれぞれ 234 万 8500 トンと拡大した。仁川の経済はかなり潤ったと思われる。ただこの昭和 12 年が戦前のピークで、日中戦争、第二次世界大戦の影響を受け衰退、満州国の貿易が中心になっていった。

大型ドック建設でジャージャー麺誕生

仁川港のドック建設は仁川に多大な経済効果をもたらしたが、思いがけない食文化をももたらした。現在、韓国、中国はもちろん日本の中華料理店でも人気メニューになっているジャージャー麺が仁川で生まれたのである。

築港起工式が行われた明治 44 年(1911)、超大型の工事とあって仁川には数千人の港湾労働者がやってきた。韓国人だけでなく日本人、清国人も含まれていた。問題は、それだけの人のお腹を満たす食事だった。短い昼食時間や夕食時間には韓国料理の店、和食の食堂はごったがえした。旧清国租界にあった中華料理店ももちろんである。日韓併合により租界がなくなったため清国人は一時的に減っていたが、機を見るに敏な民族だけに旧清国租界にはすぐに人が戻り、需要に応えようと多くの中華料理店が開業した。

その中に「共和春」という店があった。中華民国の誕生を祝い、共和の春という意味で付けた名前だった。経営者は山東省からやってきた于希光で、店舗は租界時代にホテル兼食堂として使われていた山東会館を利用した。花崗岩の石垣の上に煉瓦を積み上げた 2 階建ての立派な建物である。

短い休憩時間にワッと押し寄せる労働者。普通の調理方法で対応していたのではとてもさばききれない。売り上げ増を図るのも限界がある。そこで于希光が山東省の家庭料理を参考にして考え出したのがジャージャー麺だった。肉味噌を大量に造っておき、刻んだタマネギと季節の野菜を混ぜてさっと炒め、茹で上がった麺にのせて出す。それも分量を多くして労働者の期待に応えたのである。おいしい麺がすぐに腹いっぱい食べられるとあって「共和春」はたちまち評判になり、他の店の何倍もの客を集めた。

築港の工事は、増設工事を含めると 10 年近く続き、その間他の中華料理店も同じようなメニューをそろえるようになり、肉の代わりにイカやエビを入れた海鮮風にする店も現れてジャージャー麺は仁川の名物になった。韓国が独立した戦後は黒味噌を使い、カラメルを加えて甘い味にしたり、唐辛子を加えてピリカラにするなどレシピが豊富になった。その後中国本土はもとより日本でも人気メニューになり、中華料理の定番になったのである。

ただ仁川中華街のなかでも格式を重んじる店、たとえば中華楼、松竹楼などでは「あれは労働者のためのメニューと言い、出していなかった」と仁川中学 2 回生の久保田栄一さんは証言している。久保田さんによると「ジャージャー麺は中学生時代、友達の家でおやつがわりにご馳走になったことがある。それにしても中華楼の料理は本格的で、戦後、仕事の関係で世界中を飛び回ったが中華楼ほどおいしい中華料理を出す店は世界のどこにもなかった」と語っている。

もともとの「共和春」は現在博物館になっており、ジャージャー麺の作り方やレシピの変化など歴史が分かるようになっている。仁川中華街の大通りはジャージャー麺通りと呼ばれるようになり、「共和春」の名称を受け継いでいる店、「共和春」の当初の作り方を守っている店、于希光の子孫が経営する店など 10 数店が軒を連ね、いつも観光客で賑わっている。

月尾島物語

仁川に住んだことのある人にとって、いや、京城にいた人にとっても月尾島は忘れられない思い出の地の筈である。京城周辺では数少ない観光地であり、海水浴場があったからである。

半月の尻尾のような形をしているところから名付けられたこの島に日本が関わったのは、仁川開港に尽力した花房義質公使が壬午事変の際暴漢から逃れて月尾島に渡り、漁船で脱出したのが最初といえるだろう。その後、慶田組が船舶に提供する水を確保するため井戸を掘り利用が始まった。明治 24 年(1891)1 月には海軍の石炭庫を作るため韓国政府との間で地所借入約書を締結、島の東海岸に約 2 万㎡の土地を借り受けた。この石炭庫は日清戦争のとき随分役に立ち、石炭庫に隣接して軍の資材基地も建設された。日清戦争は日本が勝ったものの、韓国ではロシアの勢力が強くなった。三国干渉に日本が屈したのをみて、韓国政府はロシアになびくようになったからである。ロシアは明治 29 年(1896)3 月、日本に対抗して月尾島に 4 万㎡の土地を借り石炭庫を建設した。

そうしたなか、月尾島を丸ごと買い取ろうとする日本人が現れた。大阪に本社があった今で言う総合商社の五百長の仁川支店長だった吉川佐太郎である。吉川は辣腕でしられた人物だったが、韓国政府要人数人に賄賂を送り、約 50 万円で島を買収しようとしていた。観光開発が狙いとしていたが、経営不振を打開するため地形的な重要性からいずれ大金が稼げるという思惑があったといわれている。韓国政府も一旦は了承、住民に邪魔立てしないようお触れを出している。しかしそれが突然キャンセルされた。恐らくは石炭庫をもっていたロシアあたりからクレームがついたためと思われる。これを契機に五百長の経営は急速に傾き、倒産した。

明治 34 年(1901)になると韓国政府は月尾島に砲台を築いた。港湾警備のためで、それまで無かったのが不思議なくらいである。しかし結局は午砲に使われただけだった。

仁川沖海戦で日本が勝利し日露戦争が始まった直後の明治 37 年(1904)3 月、日本陸軍は仁川駅と月尾島の間の海面 900 メートルを埋め鉄道敷設工事を開始した。月尾島に揚陸した軍需物資を鉄道輸送するためだった。しかし完成したときには戦線が満州に移っており必要性がなくなっており、戦争終結後線路を撤去、道路になった。

仁川府は大正 7 年(1018)、月尾島を観光地に指定、そこから開発が始まった。まず海水浴場と公園が作られ、仁川や京城の市民の憩いの場となった。海水を沸かしてお風呂にする潮湯という珍しい施設も作られた。真水の風呂より疲れがとれると好評で、終戦まで賑わっていた。海岸から見る夕日や夕焼けは絶景とされていた。

韓国の独立後月尾島は軍事施設として使われていたが、2001 年に一般開放され、展望台、自然散策路、月尾公園、韓国移民史博物館、韓国伝統庭園などが整備され、ソウルからも大勢の人が訪れる観光スポットになっている。海岸沿いには文化通り、カフェ通り、刺身通りなどが並び、デートの場所として人気が高い。

永井照雄府尹(市長)の登場

昭和 8 年(1933)8 月、仁川府尹として永井照雄氏が赴任してきた。壮大なビジョンを持った人で、この府尹のもとで仁川は急速に発展したのだった。

永井府尹は広島県出身で大正 6 年(1917)鹿児島高等農林学校を卒業、朝鮮総督府に就職したが 3 年後に退職して京大経済学部に入りなおした。大正 12 年。京大を卒業すると再び朝鮮総督府に入り、2 年後、高等文官試験に合格、高等官になったという苦労人である。咸鏡北道学務課長、視学官、内務部地方課長、産業課長、木浦府尹を歴任して仁川にやってきた。

永井府尹は着任すると「京仁一体論」を唱え、京城と仁川を一体として開発に取り組めば、阪神工業地帯に匹敵する一大経済圏を構築できるという構想をぶち上げ、仁川市民の心をつかんだ。そうして実現のための手を着々と進めたのである。

永井府尹が最初に取り組んだのは中等教育の拡充だった。当時、仁川の中等教育機関としては伊藤博文統監の考えに沿って設立された仁川高等女学校と、同年 4 月に発足したばかりの仁川公立商業学校があった。この仁川公立商業学校は、韓国政府が設立した漢城外国語学校仁川支校をルーツとする旧仁川公立商業学校と、平生釟三郎が教えたこともある夜学校から発展した仁川南商業学校とが統合された学校だった。この学校の最大の特徴は日本人と韓国人の生徒数を同数とされていたことである。こんな学校は他にはなく,日本統治下の朝鮮で初めてだった。旧仁川公立商業学

校が韓国人主体の学校だったことを配慮したのである。

新しい仁川商業学校では日本人、韓国人が分け隔てなく勉学に励んだが、終戦時 3 年生だった名古屋在住の青木貞雄さんは「小学校でのトップクラスは日本人の場合中学校に進学したが、韓国人はトップクラスが仁川商業に入ってきた。その影響もあり、韓国人の方が成績は良かった」と語っている。

それはともかく、仁川には中学校がなかった。高等学校や大学を目指す人は、京城の京城中学校か龍山中学校へ汽車で通わなくてはならなかったのである。永井府尹は仁川中学校の創設を目指した。永井府尹にとって好都合だったのは、仁川学校組合という学校行政に関わる組織が存在し、そこには資産が豊富にあった。というのは日韓併合の際、朝鮮総督府は仁川居留民団が所有していた土地については仁川府の所有とせず、学校組合に帰属させていたからである。仁川居留民団は、浜町の埋め立て地や旧陸海軍墓地だった旭町のほとんどを自力開発し、所有していた。釜山や元山など他の居留地にはそのような資産はなかった。朝鮮総督府は他の府との均衡を図るため、それらの土地資産を府に取り上げるのではなく、仁川市民に還元できる方法として学校組合の所有としたのである。地代や家賃収入は膨大であり、学校組合はそれをもとに韓国人対象の小学校である普通学校として昭和、昭和西、大和など 6 校を次々設立したほか、寺町(旭町)小学校や龍岡小学校の校舎増改築を行っていた。

永井府尹はこの資産をもとに、総督府の資金援助をそれほど受けることなく中学設立を推進したのだった。こうして仁川中学校は昭和 11 年(1936)4 月、創立された。敷地としては山根町の市民グラウンドが充てられた。そのかわり、桃山町に 66,000^平方メートルもの土地を取得、野球場、テニスコートが整った総合グラウンドが新設された。